



TITLE:

あとがき

AUTHOR(S):

高木, 博志

CITATION:

高木, 博志. あとがき. 人文學報 2013, 104: 207-208

ISSUE DATE:

2013-03-29

URL:

<https://doi.org/10.14989/189487>

RIGHT:

あ と が き

本号、特集「近代都市の諸相」は、2006年度から2011年度まで行われた共同研究「近代古都研究」（班長・高木博志）の報告書である。

21世紀になって、京都市への観光客は年間5000万人にせまり、空前の「古都」ブームである。また世界遺産登録を競い合う、国内外の歴史都市の顕彰も盛んである。そうしたなかで「古都」を相対化した学問研究も必要であろうと考えた。本来、「古都」とは、天皇がいなくなった「旧都」（もとのみやこ）の意である。1869年の東京「奠都」による天皇の畿内よりの離脱は、古代から近世をつらぬく王権の基盤を編成替えする日本史上の事件であり、奈良・京都という古都形成の起点となった。

本研究会の成立の経緯を述べると、共同研究「近代京都研究」班（2003～2005年度、丸山宏班長）を発展させ、歴史学・建築学・造園学・美術史等の諸分野の研究者による総合的な「近代古都研究」を行なった。45回の自由な議論を行った研究会や、京都・奈良・大津などの古都や金沢・岡山・仙台・大阪などの城下町へ旺盛に巡見した。現地に立って考え、地域の自治体史編纂に携わる研究者と議論した（『人文学報』の彙報および高木博志「近代古都研究班とフィールドワーク」『人文』59号、2012年）。

「古都」は近代に一般化した概念であり、それは古都保存法（1966年）以降の戦後社会に定着した。2003年には古都保存法で大津が指定され、地方旧城下町も「古都」の対象になりつつある。また冠せられた「古都」イメージと都市行政のめざすものは、必ずしも一致したわけでない。たとえばつねに工業・産業振興を行政の基盤におく京都府や京都市の姿勢をみると、その理念と実態には歴史的にズレがあった。研究会の議論の進展のなかで、京都・奈良・首里等の王権に関わった都市のみならず、金沢・仙台・岡山・大阪等の城下町も研究対象になるなかで、古都から歴史都市へと研究対象を広げてきた。各地の歴史都市は、ナショナリズムの高揚と平行に、天平時代や平安時代や藩祖の開市時など、その特色となる時代や来歴を顕彰し「お国自慢」を定式化させた。前近代の「歴史」や「伝統」と、その近現代における捉え返しや葛藤を、政治・社会・文化・経済にわたる現実の中から多角的にみてゆきたいという当初の目標があった。また古都・軍都・学都などの表象をもつ歴史都市の比較も試みた。

その課題は必ずしも達成されたわけではなく、報告書も、本号は「近代都市の諸相」と題し、都市論一般のものを収録し、都市の歴史性に関わるものは、高木博志編『近代日本の歴史都市——古都と城下町』（思文閣出版、2013年）として別に編纂したように、両者の有機的な考察が不十分であった。今後の課題としてゆきたい。

巻頭の鈴木論文は、安政期の湖北通船路開鑿事業を京都西町奉行浅野長祚や元京都町奉行与

力平塚飄斎が主体的に実現したことを論じるが、近年の幕末の幕府官僚の役割や京都の町の自治や公共性の希求を再評価する動向にもつながる。伊従論文では、沖縄県の市制や都市計画は内地より遅れたが、歴史都市としての首里を、近現代に発展する那覇と合併しようとする内務省の官僚がめざした都市計画を取り上げた。住民不在の視点は、朝鮮王朝の歴史的な特性が加味されずに洋風の郊外住宅の実現をめざしたとみる、石田論文の「名都京城」の都市計画に引き継がれる。そうした植民地的特質は、国内で発掘できなかった王陵を朝鮮半島では発掘調査した、文化財行政にもつながるものがあった。能川論文は、陸軍軍部と大阪財閥と大阪府・大阪市などによる戦時下の豊臣秀吉と大阪城をめぐる歴史意識を探るが、大阪への郷土愛は戦時下の対外膨張の愛国主義に収斂されてゆく。東京における忠霊塔の戦中戦後の連続・断絶を視野に入れ、戦争の記憶を扱ったのが長論文である。占領軍が忠霊塔を負の記憶として処理しようとするのに対し、井下清らは戦死者を空襲など戦争の犠牲者とともに慰霊しようとした。また非戦災都市である京都の御池通・堀川通・五条通の建物疎開事業を跡づけ、戦後復興のあり方に戦災都市・非戦災都市のほかに「疎開都市」という都市の類型を提示した川口論文でも、戦後社会を射程においた戦争の意味を考える。最後の福家論文では、1950年代初頭の中ソ共産党の日本共産党への影響から、京都民主戦線が分裂してゆく過程を、京都をはじめとする国内の史料とアメリカの公文書館の史料などを博搜するなかで、国際共産主義運動の京都の民主運動の展開を有機的に捉えようとした。

本号に執筆いただいた以外の、本研究班の班員は、岩城卓二、金文京、高階絵里加、水野直樹、黒岩康博、中嶋節子、藤原学、谷川穰、小林文広、青谷美羽、秋元せき、飯塚一幸、井上章一、井原縁、岩本馨、内田和伸、大場修、岡村敬二、小野健吉、小野芳朗、河西秀哉、桐浴邦夫、工藤泰子、清水愛子、清水重敦、ヘンリー・スミス、高久嶺之介、高田祐介、田島達也、田中智子、谷山正道、辻岡健志、中川理、並木誠士、羽賀祥二、幡鎌一弘、原田敬一、日向進、廣瀬千紗子、福井純子、福島栄寿、丸山宏、毛利紫乃、本康宏史、山上豊、山田誠、吉井敏幸、吉田栄治郎の諸氏である。

なお共同研究にさいして、科学研究費補助金・基盤研究B・「近代古都研究——歴史と都市をめぐる学際的研究」（研究課題番号20320102、2008～10年度、研究代表者高木博志）の助成をうけた。

2013年1月

高 木 博 志